

---

# アウエル・バッハ 烏賊墨のリングイネ

悠 奏多

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アウエル・バッハ 烏賊墨のリングイネ

### 【Zコード】

N5116F

### 【作者名】

悠奏多

### 【あらすじ】

蘭に浮氣疑惑が浮上した！？早速コナン（と哀）は蘭を尾行するが……。鳥賊墨<sup>いかづみ</sup>＝セピア色。

「実はねコナン君。新一と連絡取れなくなっちゃったんだ」

最近元気がない蘭に、コナンは子供らしく率直に訊いた。その答えに對して嘘だ、と言い返せなかつた。だから、

「そりなんだ……。でも、大丈夫だよ。僕がいるからね！」

と、子供らしい答えを返すことしか出来なかつた。

新一と音信不通になつたから、と尤もらしい理由を付ける蘭。最近の彼女は調理中に指を切つたり、半開きのドアに気付かず突つ切りとして額をぶつけたりしていた。

少なくとも、彼女の身に何か異変が起つたのは間違いなかつた。考えあぐねた末に直接訊いてみたら、あからさまな嘘を付かれた。だつたら。

尾行して、この田で確かめるしかねえ。

「一股かけてるのね。浮氣相手の男と上手くいつてないから、彼女は落ち込んでいる」

昼休みが終わりに近い頃、コナンは今朝あつた出来事を哀にさりげなく話した。即答されたその答えに、彼は言葉を失つた。

灰原哀が、下手な慰めをしないことくらい、とつくに分かっていたことなのに。

「まだそうと、決まつたわけじゃ」

「彼女を尾行するんでしょう？ いいわ、付いてつてあげる

「いいつての」

哀は、口角を上げてその反応を無視した。そして、ランドセルを開き、教科書やノートなどをしまい始めた。その態度は、何が何でも付いていく意思表示に見えた。

「いひつて言ってんだろ！」

コナンは哀の左手首を掴んだ。教室中がざわめく。哀は腕を振り、その戒めを解いた。手首から離れたコナンの右手は、数回前後ろに揺れた後だらんと垂れた。

「近いうちに壊れると分かっている、壊れかけの人形を放つておくほど私は冷たくないわよ。それに。私が付いていくつて確信してて、そのことを話したんでしょう？ 鏡を見てごらんなさいよ、今の貴方、捨てられた仔犬のような瞳をしているわ」

ランドセルの中に鏡が入つていたが、コナンは確かめようとはしなかった。代わりに、心の胸の辺りを押さえた。心の奥まで見透かされているような気がして。何も言い返さないまま、コナンは哀の後を付いていった。

帝丹高校に着いた。蘭を発見してからコナンの様子は、別人のようになってしまった。犯人を追う刑事のように、目がきらきらしている。コナンは哀の前に行き、細心の注意を払い尾行し始めた。だが、一分もしないうちにそうする必要はないことに気付いた。今の蘭は、身体の重心がぶれ、まるで取り憑かれたかのように足元がふらついていた。

着いた先は、四階建ての団地だつた。

その建物は金網に囲まれ、廃墟のように静まり返つていた。どの窓にもカーテンがなく、電気も漏れてこない。全く人の気配がなかった。

誰も住んでいなかった。

夕焼け空を背景にしてひつそりと佇む真っ黒い建物を、蘭は遠い目で見つめていた。肌寒い風が、蘭の長い髪とブリーツスカートを揺らす。だが蘭は、乱れた髪を直すことはせず、口を半開きにした

まま眺め続けていた。

とても、声をかけられる状態ではなかつた。

「ここは、蘭の両親が別居するまで住んでいた場所だつた。彼女にとつて、たくさんの思い出が詰まつた場所。それは、かつて何度もここに遊びに来て、彼女のことを誰よりもよく知るコナンだからこそ、確信が持てる。

「何してゐるのよ、こんなところで」

まさかの一言だつた。無関心の塊が、興味を示すなんて。突然背後から話し掛けられた蘭より、コナンの動搖は大きかつた。てつくり、帰りましょ、と言つと思つていたのに。

一瞬背筋を伸ばした後、蘭はゆっくりと後ろを向いた。コナンと哀を見た後、学生鞄を抱き締めて一つ深呼吸をした。

「何だあ。コナン君と哀ちゃんだつたの。一人で一緒に帰つて、仲いいじやない」

突つ込むとこそこじやねーだろ！ どうしてここにいるのかを突つ込んでくれよ、とコナンは思つたが、それはそれで返答に困る。更に哀は一步前に進み、

「ここつて、毛利探偵事務所とは逆方向よね。この近所に、新しい男が住んでいるの？」

と、挑発的に訊いた。

蘭の目的が分かつた以上、その質問を否定することは分かつていた。

「もしそうだつたら、ちゃんと工藤新一サンに言わなきゃダメよ。もう言つたのなら、ごめんなさいね」

「いつ、ゼツ テー 確信犯だ。」

蘭が二股をかけるようなタマじやないつて知つてて、カマをかけている。それは今、自分が納得した表情をしているからだ。それを

見て確認した上で、哀は的外れな質問をしていく。

「違うよ」

「大丈夫。誰にも喋らないから安心して。」  
「うう、見えて、口は堅いから」

「ここはね。昔、住んでた場所なんだ……」

「へえ」

哀のそつけない態度に、コナンは彼女の耳元で『言ご過ぎだね』と早口で囁いた。そしてコナンにも、

「へえ」

と、さつき蘭に言つたのと同じ言葉、同じ口調で返した。  
「思い出の場所がなくなつたくらいで、こんなに寂しくなつちゃつのは……、どうしてなのかな」

震える呼吸を噛み締め、蘭は手の甲で田を擦る。その様に、コナンは、

「大丈夫だ。俺がいつからよ」

と、一言声をかけたかった。でも、言えなかつた。小さい手足、低い身長。世間では江戸川コナンで通つてゐるこの小さな身体で、それを言つ資格はない。今の蘭には、新一以外の人間が何を言つても心に留まらない。

「古い建物だし、取り壊されることくらい分かつて……たのにね」  
思い出の場所がなくなつても。大切な人が側にいてくれたら、心に出来た溝を埋めることが出来る。それが出来ない蘭は、思い出の場所がなくなるまでここに通うしかなかつた。

「くつだらないわね」

田の前にいる蘭と哀が、大きく揺らいだよつた気がした。  
「空氣読めよ空氣！」この、陰惨とした空気が読めねえほど馬鹿じやねえだろ。元太じやあるめえし。

この状況で、堂々と、くだらないと言える哀に、尊敬さえ覚えてきた。と、同時に、付いてきて貰った自分自身を責めた。

やはり、蘭は肩で呼吸をしながら潤んだ目で訴えている。どうしてよ、そんな言葉が聞こえてきそうだ。

「思い出に浸れる場所がある貴女が、悲劇のヒロイン気取りでいるからよ。茶番、茶番、飛んだ茶番劇だわ！ 私なんか……」

哀は、言いかけて一人に背中を向けた。それ以上は何も言えないようだつた。彼女の小さい肩が、わずかに震えている。

遠くの方で、鳥の鳴き声が聞こえた。いつの間にか、太陽が地平線の向こうに飛び込んでいた。西空低くに這う橙は、現れたばかりの闇によって太陽と同じように押し込まれていく。

「ご飯、作りにきてよね」

数歩進んだ哀が立ち止まり、そう咳いた。哀が作った気まずい沈黙は、哀自身が破つた。その低い声に弾かれ、蘭は彼女の小さな背中を見つめた。

「阿笠博士の家によ。もちろん、江戸川君と一緒にね」

「灰原、オメー……」

「土曜日か日曜日がいいわね。ついでにあの子達も。週に一度くらい賑やかな日があれば、嫌でも思い出すでしょ」

ただでさえ掴みどころのない哀が、どう言ひつけたのかは分からぬ。

でも。思い出の場所すらない哀が、蘭のような気持ちにすられない虚しさが伝わってくる。事情を知っているからこそ、一見飛んでもない発言をした哀を、コナンは責められない。

「ありがと、哀ちゃん」

蘭のその一言で、コナンの中で蠢いていたものがすうっと消えた。

それと同時に、一日でも早く解決しなければ、と東の空を向いて誓つた。

(後書き)

思い出の場所がなくなつても、貴方さえいてくれたらいい。

今回のテーマは『スイーツ系』でしたが、私には向いてないと思いました。

精神年齢の差を見せ付けた作品でもありました。哀つて大人だと思う。欠陥が多い蘭の方が、ヒロインには向いてますけどね。

来月下旬から、いよいよクリスマス週間にに入ります。どんなお祭りがあるのか楽しみだつたり。ソチ五輪まで、あと五年！ バンクーバー？ どうでもいいですねえ。現地に言つてクーリック、プルシェンコ、ホルキナ、ヤグデインが見たい。地元開催だし、絶対彼らは来る。

予告：今、小五郎と英理の話が書きかけで、佐藤と高木の話も構想中です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5116f/>

---

アウエル・バッハ 烏賊墨のリングイネ

2010年10月8日15時45分発行